今川了俊「道行きぶり」注釈(三)

稲田利徳

この注釈は、前稿「今川了俊『道行きぶり』注釈(一)(二)」(研究集録、第八十九号・第九十号)に続くものである。念のために、凡例を再録しておく。

凡例

一、本稿は、今川了俊の紀行文「道行きぶり」の注釈である。

一、底本には書陵部蔵桂宮本(五〇二―七四)を採用し、次の方針で校訂本文を作成した。

(1)漢字・仮名を原則として通行の字体にかえ、新字体のある漢字はそれを用い、濁点、句読点を施した。

(2)底本の仮名を漢字に改めた場合、表記を改めた本文の右側に、もとの仮名を記した。漢字の読みを()の内に示したものもある。

(3)仮名遣いは原文のままとし、送り仮名を補った場合は()内に記入した。また、歴史的仮名遣いと一致しない場合は、()を付して歴史的仮名遣いを傍記した。ただし、仮名に漢字を宛てた場合は、これを省略した。

(4)反復記号は底本のままとし、踊り字の場合は、もとの仮名に直し、右側に「ゝ」を付した。

(5)底本の丁数は省略し、本文も適宜改行した。

(6)底本の「道行触上」「中」「下」の区切りは尊重して残したが、他は適当な箇所で区切り、番号と内容に即した見出しを付けた。

一、校異・校訂本文は次の原則で作成した。

(1)校合伝本としては、松平文庫本(略称―松)、扶桑拾葉集所収本(扶)、中川文庫「桑弧」所収本(中)、群書類従本(群)、内閣文庫本(内)、九州大学本(九)の六本を用いた。鶯宿雑記本は群書類従本の写しなので割愛した。

(2)異同のあるときは、その文字や表記の右肩に番号を付し、校異欄に異同を記した。ただし、意味もない独自異文や明らかな誤字などは校異欄に掲げなかったものもある。

(3)底本の本文を他の伝本で校訂したところは〔 〕でそれを示した。

一、「道行きぶり」の地名をもとに、室町時代の山陽道の道筋を考察した、渡辺世祐氏「足利時代の山陽道」(歴史地理、第四巻、第八号、第九号、第十号、明治三十五年八月、九月、十月)は、「道行きぶり」の注釈に際して必見の文献である。本稿でも随時参考にするが、そのつど文献名を記すのは煩瑣なので、これを「渡辺氏」と省略して取り込む。

一、今川了俊は、「言塵集」「師説自見集」「歌林」「了俊日記」など、和歌・連歌の用語に解説を加えた歌学書を残している。この注釈でも、「道行きぶり」の用語は了俊自身の理解に聞くという意図も込め、時々引用することがある。

一、書陵部蔵桂宮本「道行触」の翻刻を御許可くださった宮内庁書陵

部に対し、厚くお礼を申し上げます。

＊　＊　＊　＊

道行触中

十　沼田から海田を経て佐西の浦へ

葉月の廿九日、安芸の国沼田の里をたちて、①入野といふ山里を通り侍るに、此（の）所は、昔、小野篁の故郷とて、やがて篁とも小野とも申（し）侍るとかや。大（き）なる山寺あり。今夜は高谷といふ里にとどまりぬ。

又の日は、大山といふ山路越え侍るに、紅葉かつ〳〵色付（き）わたりて、柞・柏などうつろひたり。日影だに洩らぬ山中に、谷川こなたかなたに流れめぐりて、②岩たたく音心すごし。伏木などの横はりつつ、③〔谷〕深き上を、さながら道にする所も侍（り）。

紅葉ばの朱の④〔ま〕籬にしるきかな大山姫の秋の宮居は

此（の）山越え過ぎて、瀬野といふ里あり。ここもみな⑥山間の細道なり。駿河の宇津の山の面影ぞう⑦〔かべ〕る。

晦日は、海田とかやいふ浦に付（き）ぬ。南には深山重りたり。⑧籠に入海の干潟はる〳〵と見え、⑨北の山際に、所々家あり。ここに⑩廿日ばかりとどまりて、⑪長月の十九日の在曙の月に出でて、潮干の浜を行（く）⑫ほど、なにとなくおもしろし。さて佐西の浦に付（き）ぬ。

〔校異〕①入野ー底本は右肩に「ニイ」とあり。②てーナシ（内・九）。③すこしーすゝし（群）。④〔谷〕ー底本「苔」によめる。松・扶・中・群・内・九の諸本で校訂。⑤〔ま〕かきー底本は「たかき」（「さかき」ともよめる）とあり。松・扶・中・群・内・九の諸本で校訂。⑥みなーとな（内）。⑦う〔かへ〕るー底本「うるめる」とあり。松・扶・中・群・内・九の諸本で校訂。⑧とーを（内・九）。⑨北のー小野（内）、北野（九）。⑩廿ー十（内・九）。⑪長月のーナシ（内・九）。⑫ほとーなと（内・九）。

〔語釈〕○葉月ー陰暦八月の異称。○安芸の国ー旧国名。今の広島県の西部。芸州。○沼田の里ー安芸国沼田郡のうち沼田川流域の一帯。今の竹原市・豊田郡本郷町と三原市西部に比定される。○入野ー広島県賀茂郡河内町入野。○小野篁ー延暦二十一年（八〇二）ー仁寿二年（八五二）。享年五十一。「凌雲集」の撰者。参議岑守の子。承和五年（八三八）、遣唐使を諷して隠岐に配流。「古今集」に六首入集。「江談抄」「古事談」「撰集抄」などをはじめとする諸書に、彼に関する説話がみえる。○大（き）なる山寺ー広島県賀茂郡河内町入野字水越にある竹林寺をさすと推測される。この寺は篁山山頂付近にあり、篁山と号し、真言宗御室派。本尊は千手観音。寺には「竹林寺縁起絵巻」（中世文芸叢書9『瀬戸内寺社縁起集』に影印・翻刻）が所蔵されており、小野篁生誕伝承を伝えている。○高谷ー東広島市高屋町高屋堀の辺。入野川支流萩原川の中・上流沿いを村域とする。○大山ー現在の広島市安芸区瀬野川町上瀬と東広島市八本松町宗吉を結ぶ大山峠付近。○かつ〳〵色付（き）わたりてーこの「かつ〳〵」は、「やっと・わずかに」の意と「早くも」の意に解せるが、「わたりて」からみて、

「早くも一面に色付いて」とみたい。○柞ーブナ科の落葉高木。楢や楢の総称。○柏ーブナ科の落葉高木。葉は広く、餅を包むのに用いる。○岩たたく音ー谷川の水が岩をたたきつける音。用例「いはたたくたぎつ河波おとさえて谷の心や夜さむなるらむ」（新勅撰集・冬・前関白）。○心すごしー従来、群書類従本の本文によって「心涼し」と引用されてきたが、ここは「日影だに洩らぬ山中」に、谷川の水の岩を打つ音を、いかにもぞっとするほどもの寂しく聞いたもので、他の諸本のように「心すごし」とある本文が適切。用例「御墓は、道の草しげくなりて、わけ入り給ふ程、いとど露けきに、月も雲もかくれて、森の木立こぶかく心すごし」（源氏物語・須磨）、「大方もさびしと思ふ秋のよに心すごくもうつ衣かな」（宝治百首・真観）。○伏木など……さながら道にする所ー倒れ伏した大木が、深い谷の上に横たわって、それがそのまま道のようになっている所のさま。○「紅葉ばの」の歌ー「籬」は柴・竹などを粗く編んで造った垣だが、「朱の籬」という表現は熟さない。底本の「朱のたかき」または「朱のさかき」も誤写と思われ、その傍記の「朱のゐかき」も見慣れない表現。結局、他の諸本により「朱の籬」と校訂したが、神社との関係では「朱の玉垣」が措辞として頻出。紅葉と絡めた歌も「もみぢ葉のあけのたまがきいく秋のしぐれのあめにとしふりぬらん」（新勅撰集・神祇・寂延法師）、「神のますもりの下てるもみぢばの色もてはやすあけの玉がき」（続詞花集・神祇・源忠季）と散見する。「紅葉ばの朱の籬」は、神社の「朱の籬」を紅葉に比喩したとも考えられるが、やはりここは、前文の「紅葉かつ〳〵色付（き）わたりて」からみて、色付いた紅葉を「朱の籬」に見立てたとみたい。「宮居」は神が鎮座する社。「秋の宮居」と紅葉を絡めた類歌「君がはや秋の宮ゐにうつるべきほどを紅葉の色にこそしれ」（新葉集・秋下・嘉喜門院）。「大山姫」は大山度神社のことで、「芸藩通志」は、その廃祠は「上瀬野村大山の内、氏輔呂とよぶ地にあり」と記す。○瀬野ー広島市安芸区瀬野川町上瀬野、下瀬野の辺。瀬野川流域、八世以山山麓に位置する。○駿河の宇津の山ー静岡市宇津ノ谷と志太郡岡部町の界嶺で、東海道の難所の一つ。瀬野の山間の細道で、宇津の山の面影を想起したのは、「伊勢物語」（第九段）の「行き行きて、駿河の国にいたりぬ。宇津の山にいたりて、わが入らむとする道はいと暗う細きに、蔦、かへでは茂り、もの心細く」から「うつの山さこそはかねて聞きしかど霞をわくる蔦の細みち」（建保名所百首・行意）などと形象化された「細道」の一致による。○海田ー広島県安芸郡海田町。瀬野川下流域の南東に位置。『日本歴史地名大系』は、「道行きぶり」の「北の山ぎはに所々家あり」を、海田市から船越（現広島市安芸区）あたりのことと推測する。○長月の十九日の在曙の月ー「今こむといひしばかりに長月のありあけの月をまちいでつるかな」（古今集・恋四・素性法師）、「九月二十日あまりばかりの有明の月に」（和泉式部日記）、「九月二十日のころ、ある人に誘はれ奉りて、明るまで月見歩くこと侍りしに」（徒然草・第三十二段）など、長月の二十日頃の有明の月夜は、情趣深いものとされた。それが、次の「なにとなくおもしろし」の感興を催させたのであろう。○潮干の浜ー『日本歴史地名大系』は「了俊の通った『しほひの浜』は、甲越峠を越える古山陽道に代わって、海辺を行く主要ルートの地位を得つつあったことがうかがえる」と記述する。○佐西の浦ー広島県佐伯郡廿日市の辺。佐方川と可愛川の間の海岸砂州平野と新開地に開けた町。東と南は瀬戸内海に臨む。

〔通釈〕八月二十九日、安芸の国の沼田の里を出発して、入野という山里を通りましたが、この所は、その昔、小野篁の故郷ということで、そのまま、篁とも小野とも申しているとか。そこに大きなる山寺がある。今夜は高谷という里に留まった。

翌日は、大山という山道を越えたところ、紅葉が早くも一面に色付いて、柞や柏などの葉も紅葉していた。日の光さえも洩れて来ない山中に、谷川があちらこちらに流れ廻っていて、水が岩をたたきつける

音が、ぞっとするほどに寂しかった。伏し木などが深い谷の上に横たわってそれがそのまま道になっている所もある。

赤く色付いた紅葉が朱の籬のように廻っていて、そこが大山姫が秋に鎮座する神社だと、はっきりわかることだ。

この山を越え過ぎて行った所に、瀬野という里がある。ここもすべて山間の細道である。駿河の宇津の山の面影が、ふと思い起こされた。

晦日には、海田とかいう浦に到着した。その南には深山が重なっていた。麓の方には入海の干潟が遠くまで遙かに見え、北の山際には、所々に家がある。この所に二十日ほど滞在して、九月十九日の有明の月の頃に出発し、潮の引いた浜辺を行く間、なんとなく興趣を催した。そうして佐西の浦に到着した。

〔考〕○この所から底本は「道行触中」となり、「はつきの廿九日…」の右肩に「応安四」と小字で記入されている。「五月十九日備後の尾道より安芸国ぬたといふ所にうつり侍」の所にも「応安四」とあったことは、すでに触れたが、こういった年時注記は、この二箇所だけである。これが了俊自身の手になるとすれば、先にも触れたように、「道行きぶり」が、応安四年の紀行である事実を示すことになる。○この章では、大山山中と、海田から潮干の浜を行くときの気持が印象深く記述されている。前者では、日の光さえ洩れない鬱蒼とした深山の中で、激しく岩をたたく谷川の音を「心すごし」と感じたのに対し、後者では、遙かに続く広々とした浜を、九月の有明の月を眺めながら行く心を「なにとなくおもしろし」ととらえて対照的である。戦いに向う了俊をとりまく自然が、彼の心に種々な陰翳を催させるさまが窺えて興味深い。○沼田到着前後に了俊が認めた発給文書を紹介しておく。応安四年七月二十二日には、斑嶋女地頭宛に「凶徒対治事、別而被忠節之条、所感悦也」との感状を出し（斑島文書）、さらに八月九日には、宇都宮大膳亮（経景カ）宛に、「愛智左馬助相共、馳越豊前国、致忠節条、尤以神妙候…」なる感状・催促の書状を認め、（佐田文書）、九月十二日には、長瀬尾張入道（妙道）宛に、備後国利生塔婆料所同国横田村地頭職を三吉掃部助の押領するのを停め、下地を同寺家雑掌に交付させるとの書下を提出している（浄土寺文書）。（川添昭二氏「今川了俊の発給文書」、九州中世史研究、第三輯、昭和57年6月ほか参照）。

十一　厳島参詣

廿日は厳島に詣で侍（り）。此（の）島は、峯三（つ）四（つ）ばかり聳えあがりて、深山木の年古りたるうちにまじりて、老（い）たる松の、岩上に生（ひ）傾きつつ、磯際まで繁りたり。東に差し出（で）たる山の崎と、此（の）島のあ〔は〕ひは、二十余町ばかり隔てたる中に、小嶋のさと〳〵しげにて見ゆる一（つ）侍（る）。これなむ小黒島といふなるべし。此（の）島のあたりをば、あたととぞいふめる。

島守にいざことととはむ誰（が）ためになにのあたととぞ
名にし負ひけむ

その南にあたりて、霞める嶋〳〵あり。まさかりの瀬戸とぞ申（す）なる。この国と伊予の国との境にて侍るとかや。海の上に、国の境の見ゆるこそ珍かなれ。

彼（の）御社のやうは、少し戌亥に向ひたり。廊の下

まで潮満ち入(り)たり。鳥居は海の中にたたり。嶋の四方に、入江どもあまた有(り)て、見所限りなく侍るなり。百浦侍るとぞ申(す)。あはれ心静かにて、此(の)あたり漕ぎめぐりつつ、思ふ人どち見侍らましかばと、先(づ)都の友も故郷の親も恋しく侍る哉。御仙・滝もとなどいふ所〳〵の侍(る)なれども、「日暮れぬべし」とて、いそがはしげにすすめられ侍(り)しほどに、見ずなりにき。

さて罷り申し侍(り)て、御前の浜漕ぎ出でて、仏舎利二粒東寺葉室海に入(れ)奉りぬ。このたびの祈(り)なるべし。

夕日に向ひて漕ぎ渡るほどに、「引く潮に向ひて、船遅く侍(れ)ば、磯際のぬるみにかけて侍りし」など、舟子どもの言ふを、「などてかくは言ふぞ」と尋ね侍(り)しかば、「かやうに潮の満干の早きときは、磯際は潮のさかさまに流れ侍るほどに、船の漕ぎよく侍(る)也。ぬるみと〔は〕、よどの事を申(す)」と言ふ。

磯際のぬるみにかけて出(で)し船の早潮みちに〔向ふ〕ほどなさ

この浦は、四方に山〳〵うち重りて、いづくを潮の満干も通せんと覚〔ゆ〕る海中に、此(の)嶋も侍る也けり。〔まことに〕海の宮この主の御座所と覚えて、此(の)世の中とも見え侍らず。かへりてすさまじきまでぞ覚えし。

〔校異〕①つゝ—つき(内・九)。②まて—にて(内・九)。③あ〔は〕ひ—底本「あらひ」、松・扶・中・群・内・九の諸本で校訂。④は—ナシ(内・九)。⑤はかり—ナシ(内・九)。⑥て—ナシ(内・九)。⑦こくろ—こゝろ(内)。⑧めるーなる(松・扶・中・群・内・九)。⑨めるーかる(内・九)。⑩なるーなり(松)。⑪のーナシ(内・九)。⑫国—国の(内・九)。⑬入たり—たる(内)、たり(九)。⑭たゝり—たてり(内・九)。⑮み所—其所(内・九)。⑯〳〵—ナシ(内・九)。⑰侍なれ—侍るれ(内・九)。⑱を—也(内・九)。⑲に—の(内・九)。⑳みちひ—まかし(内・九)。㉑〔は〕—底本「る」、松・扶・中・群・内・九の諸本で校訂。㉒に—は(内)。㉓〔向ふ〕—底本「ちかふ」、松・扶・中・群・内・九の諸本で校訂。㉔さ—き(群・内・九)。㉕いつく—いつら(群)。㉖も—し(内・九)。㉗せん—らん(内・九)。㉘おほ〔ゆ〕る—底本「おほる」、松・扶・中・群の諸本で校訂。㉙〔まことに〕—底本「さとに」、松・扶・中・群も「さとに」、内・九は「寔に」、傍注と内・九の諸本で校訂。

〔語釈〕○厳島—広島湾の西南にあり、佐伯郡大野町との間にある大野瀬戸を隔てて位置する島。宮島とも別称。全島広島県佐伯郡宮島町に属す。○峯三(つ)四(つ)ばかり聳え—厳島には北東部に標高五〇〇メートル級の弥山・駒ケ林・獅子岩など、南西部には四〇〇メートル級の岩船岳の峯が聳える。○深山木の年古りたる—厳島は、古来、神霊を斎く島として畏敬され、厳島神社の神域として保護されて来たので、当時から原始林が残っていた。○老(い)たる松の岩上に生(ひ)傾き—樹齢を重ねた松が岩の上に生えて傾いているさま。参考歌「た

ねしあればいはにも松はおひにけり恋をしこひばあはざらめやは」（古今集・恋一・読人しらず）。○東に差し出（で）たる山の崎ー「山の崎」は、山の突き出た所、山の出鼻。この「山の崎」が具体的にどこをさしているのかは、眺望している作者の位置も判然としないので特定しがたい。ただ、次に続く「小黒島」「あたと」の辺を眺望していることから判断すると、了俊は宮島瀬戸側にいて、西能美島沖美町の岩根鼻または入道鼻の辺を見ていたとも推測される。○二十余町ー一町は六十間で約一〇九メートル強。従って約二二〇〇余メートルほど。○さと〳〵しげー語義不明。「里々し」で人里がありそうなの意か。「源氏物語」（総角）に「この常不軽、そのわたりの里〳〵、京までありきけるを」と「里々」がみえる。○小黒島ー渡辺氏「此島厳島より東南の海中にあり。道行ぶりの記事によれば小黒島の辺をば阿多太といふとあり。然るに毛利家芸陽探勝に阿多島厳島沖にありとあれば小黒島の事をば阿多太島と呼びしか」と、小黒島＝阿多太島かと推測する。ただし、西能美島の西方海上に小黒神島なる近似の小島があり、これをさした可能性もある。○あたとー広島県大竹市阿多田島の辺。「芸藩通志」はこの島を「阿太止（あたと）・阿多々（あたた）」とも記し、「厳島図会」も「阿多太島」の所に、この「道行きぶり」の記事を引く。ただし、了俊は「あたと」を島の名としているわけではなく、「小黒島」のあたりを「あたと」と呼ぶとしている。○「島守に」の歌ー「島守」は島の番人。「あたと」は、地名に「仇」を掛ける。この歌は「いざこととはむ」「名にし負ひ」からみて「名にし負はばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」（伊勢物語、第九段）に発想を学ぶ。類歌「わがためになにのあたとてはるかぜのをしむとしれるはなをふくらむ」（続古今集・雑上・伊勢）。○まさかりの瀬戸ー渡辺氏「諸書を考ふるにも傍証とすべき記事なし。伊予の界と云へば厳島より遙か南を指せしならん」と不詳とする。「鹿苑院殿厳島詣記」にも「此南のかたにあたりて、伊予国まさきがふろ、いほたうのうらのせと、ふたかみまさかりのせと、いしかみのせと、ぬわとつなつわなどいふ所には、島々いくらも四方にならびたり」とみえる。安芸国と伊予国との境界には、中島と怒和島の間に部屋の瀬戸、津和地島と怒和島の間に津和地の瀬戸などもあるが、「まさかりの瀬戸」がどこに比定されるか不明。○伊予の国ー旧国名。今の愛媛県。予州。○彼（の）御社ー厳島神社のこと。佐伯郡宮島町にある。安芸国の一宮。祭神は宗像三女神である市杵島姫命・田心姫命・湍津姫命。伊都岐島神社とも記す。祭神である宗像三女神は、海上安全・商売繁盛の守護神として信仰されてきた。○戌亥ー北西の方角。戌亥の方角に神がやどるという民俗信仰が古くからあるが、了俊がわざわざ「戌亥に向ひためり」と記した背景には、それを意識してのことであろうか。なお、日本文学における戌亥信仰に関しては、三谷栄一氏『日本文学の民俗学的研究』に詳しい。○廊の下まで潮満ち入（り）たり。鳥居は海の中にたちー現在の厳島神社の景観もこれと同じ。廊の下に潮が満ち、海中に鳥居のある光景は、厳島神社の神秘的な景観を象徴するものとして、例えば「とはずがたり」「撰集抄」「平家物語」をはじめとする、中世文学にも印象深く描写されている。（〔考〕参照）。○嶋の四方に、入江どもあまたー厳島には厳島門前周辺の浦を除き、島の周囲に、杉の浦・鷹巣浦・腰細浦・青海苔浦・山白浜・須屋浦・御床浦などがあり、これらを「七浦」と総称する。次の「百浦侍るとぞ」も、こういった浦々を念頭にしての伝承だろう。○あはれ心静かに……思ふ人どち見侍らましかばーこの美しく神秘的な景色を、静閑な気持で、心の通いあった人と眺めたいとの願望。そこに決死の戦いを前にした、不安で孤独な思いをかみしめる、作者の悲哀の感情が窺える。なお、「漕ぎめぐり」「思ふ人どち」と眺望したいとの表現は「鶉鳴く古りにし郷の秋萩を思ふ人どち相見つるかも」（万葉集・巻八）、「神さぶる垂姫の崎漕ぎめぐり見れども飽かずいかにわれせむ」（万葉集・巻十八）など、「万葉集」の措辞・発想を摂取している。また、こういった願望は、須磨

に流謫された光源氏の「かかる折ならずは、をかしうもありなまし」と須磨の景観を眺めた心境にも通うものがある。○都の友も故郷の親も―前文の「思ふ人どち」の具体例として「都の友」「故郷の親」とを提示したもの。「都の友」と眺望する例歌「ことと へどこたへぬ月のすみだ河みやこのともとみるかひもなし」（玉葉集・旅・後二条院権大納言典侍）。「故郷の親」とあるが、了俊の父親は今川範国（母は未詳）。嘉元二年（一三〇四）出生、至徳元年（一三八四）死没説に依拠すると（川添昭二氏『今川了俊』）、この年父範国は六十八歳頃。○御仙―厳島神社の背後にある、島の中で最も高い弥山のこと。標高五二九・八メートル。山頂付近には巨岩が連なり、古くから山岳信仰の対象とされた。○滝もと―厳島に「滝もと」という見所はみえない。現在、滝町の最上部に滝山水精寺大聖院があり、「厳島図会」によると、その大聖院の麓に「滝本坊」があったという。了俊は実際には「滝もと」を訪れていないので、判然としないが、「御仙・滝もと」と見所を並べたとき、この「滝本坊」そのものを念頭にしていたとは思われない。これは恐らく、弥山の中腹にある滝の宮やその山上にある白糸の滝、さらには弥山の麓にある滝山大聖院の辺などを念頭にしたものではなかろうか。滝の宮は隅岡宮ともいい、高倉院も参詣している。（高倉院厳島御幸記）。○所〳〵―ここは見所、名所の意。○「日暮れぬべし」とて……見ずなりにき―この場面は「伊勢物語」（第九段）の「渡守、『はや舟に乗れ、日も暮れぬ』と言ふに、乗りて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず」を想起させる。○仏舎利二粒東寺葉室―「仏舎利」は釈迦の遺骨。仏骨。「東寺」は京都市南区九条町にある東寺真言宗の総本山で、正式には教主護国寺。東寺の仏舎利は「国家鎮護之本尊、朝廷安全之秘術」（東寺文書、元弘三年九月二十二日、後醍醐天皇宸翰勅書）として著名で、「東寺御舎利相伝次第」も存する。なお、「東寺文書」の貞治七年正月十五日の勘解由小路仲光仏舎利奉請状と応安三年正月十四日の柳原忠光仏舎利奉請状とに「一粒　了俊」とみえるのは注意される。厳島の海中に投じた東寺の仏舎利一粒も、こういった機会に入手したものの一粒であったろう。「葉室」は、京都市西京区山田開キ町の葉室浄住寺をさす。この寺の仏舎利も鎮護国家の霊宝として仰がれ、その経緯は「報恩寺牙舎利縁起」に詳しい。○このたびの祈（り）―仏舎利二粒を海中に奉ることによって、九州平定の戦勝祈願をしたこと。なお、厳島の海中に仏舎利を投じたのは「水神・竜神ノ二人ノ竜女参り、御髪ヲ二二分ク、此竜神女ハ厳嶋ノ大明神、水神女ハ宗像ノ大明神ト後ニ顕レ給ケリ」（八幡愚童訓）とあるように、八幡信仰と関連していたのかもしれない。○ぬるみ―流れのゆるやかな所。淀んだ所。用例「吹く風をいはにへだてて山河のぬるみにつどふあぢのむらどり」（夫木抄・覚盛法師）、「弱き馬をば下手に立てて、ぬるみに付けて渡すべし」（源平盛衰記・巻三十五、高綱渡二宇治河一事）。○かけて―「掛けて」で、ある所をめざす意。用例「眉のごと雲居に見ゆる阿波の山かけて漕ぐ舟泊り知らずも」（万葉集・巻六）。○舟子―掛取りの下にあって、船の運航に従事する人。水夫。○よど―水の流れがよどむこと。また、よどんだ所。淀み。用例「落ち激ち流るる水の岩に触れよどめる淀に月の影見ゆ」（万葉集・巻九）。○「磯際の」の歌―上句は先の舟子の説明にあるように、潮の満干の早いときは、磯際の淀みの方が漕ぎよいので、その「ぬるみ」をめざして漕ぎ出した船の意。下句はやや解し難い。「早」を副詞とみて、「向ふ」にかけることも考えられるが「ほどなさ」と重複する。ここは「早潮路」「早潮満」の意か。「早潮」と船との関係は、了俊自身も「早しほにをし落されじと、舟子ども声をほにめげてこぎなめたり」（鹿苑院殿厳島詣記）と描写している。歌は、せっかく「ぬるみ」をめざして漕ぎ出した船が、すぐに早潮の流れ路に向うさまを詠じたものか。○この浦は……通せんと覚〔ゆ〕る―この浦は四方が山に囲まれ、潮の満干のときは、どこを通るのかと不審に思われる意。○此（の）島―厳島のこと。○海の宮

こ―海中にあるとされる都。竜宮。竜神や乙姫が住むという宮殿がある。「海の都と申は、竜宮の事也」（梵灯庵袖下）。「尋ねてはなどあはざらん人すまぬ海の都のありかなりとも」（草根集）。○御座所―貴人の居所。○かへりてすさまじき―厳島を竜宮の「主の御座所」とみて、この世のものとも思われぬと評しながら、なぜ、かえって「すさまじきまでに」思ったのか、その理由は必ずしも判然としない。海中にあるはずの竜神の御座所が海上にある不自然さによるものか。あるいは、須磨にあった光源氏が夢をみて、「おどろきて、『さは、海の中の竜王の、いたく物めでするものにて、見いれたりけるなり』と、おぼすに、いと、ものむつかしう、この住まひ、たへがたく思しなりぬ」（源氏物語・須磨）などの場面を念頭にしての感情であろうか。

〔通釈〕（九月）二十日には厳島に参詣しました。この島は、峯が三つ四つほど高く聳えあがっていて、深山木の、年輪を経た古木に混って、松の老木が岩上に生え傾きながら、磯際まで繁っていた。東の方に突き出ている山の崎と、この島との間は、二十余町ほど隔てているが、その中に小さい島で、人里のあるように見えるのが一つあります。これを小黒島というのであろう。この島のあたりを、「あたと」というらしい。

島守にさあ尋ねてみよう、いったい誰のため、どんな仇があるというので、「あたと」という名を付けたのかと。

そのちょうど南の方向に、ぼんやり霞んだ島々がある。まさかりの瀬戸と申すようだ。（この瀬戸が）この国と伊予の国の境界になっているとか。海の上に国境があるのは珍しいことだ。

この御社のさまは、少し北西の方向にむいているらしい。回廊の下まで潮が満ち入っていた。鳥居は海の中にたっていた。島の四方には、入江などが多くあって、見所が際限がないほどあります。百浦もあるということです。ああ、心安らかに、この辺を漕ぎ巡りながら、親しい人達と眺望したら、どんなによかろうと、まっ先に、都の友や故郷の親が恋しくなったことです。御仙・滝もとなどという見所などもありましたが、「日が暮れてしまいそうだ」と言って、慌しくせきたてられましたので、見ないままになった。

さて帰って参り、（神社の）前の浜に船を漕ぎ出し、仏舎利を二粒、東寺と葉室とのを海中に入れ申し上げた。今度の旅の戦勝祈願のためである。

夕日に向かって漕ぎ渡って行く間に、「引き潮に向かって漕ぐと、船の進行が遅くなるので、磯際のぬるみをめざしています」などと、舟子どもが言うのを聞き、「どうしてそのように言うのか」と尋ねましたところ、「このように潮の満干が早いときは、磯際は潮が逆流しますので、船が漕ぎよいのです。ぬるみとは淀のことをいうのです」と言う。

磯際のぬるみをめがけて漕ぎ出した船が、すぐに早潮路に向ってしまうことだ。

この浦は、四方に山々が重畳しており、いったいどこを潮の満干が通るのかと思われるが、そんな海の中に、この島もあったのだった。まことに海の都の主人がお住いのように思われ、この世のものとも見えません。かえって興ざめのように思われた。

〔考〕了俊の目がとらえた厳島と厳島神社の景観が鮮明に描写されている。ここで参考までに、中世人の見た厳島の光景を引用しておく。

治承四年（一一八〇）、高倉院が厳島神社に参詣したさまを、源通親は、「午の時に宮島に着かせ給。神宝の舟たづねらる。かねてまいり設けたるよし申。御やうじの舟しばらく待たるる。空のけしき、所の有様、目も心も及ばず。大唐の怨寺かくやとぞ見へ、神山の洞などに出でたらん心地す。」（高倉院厳島御幸記）と記す。高倉院の厳島参詣のことは、「平家物語」（巻四）にもみえる。また、乾元元年（一三〇二）に厳島に詣でた、後深草院二条は「かの島に着きぬ。漫々たる波の上に、鳥居遥かにそばだち、百八十間の廻廊、さながら浦の上

に立ちたれば、おそびただしく船どももこの廊に着けたり。（中略）十三夜の月、御殿の後の深山より出づる景色、宝前の中より出で給ふに似たり。御殿の下まで潮さし上りて、空に澄む月の影、また水の底にも宿るかと疑はる」（とはずがたり・巻五）と神秘的に描く。

一方、「撰集抄」（巻五の十二）の「安芸厳嶋眺望事」にも次のように景観を描写している。

安芸の厳嶋の社は、うしろは山ふかくしげり、まへは海、左は野、右は松原也。東の野のかたに清水きよく流れたり。是をみたらゐと云。御社三所におはします。又すこし前のかたにひきのけて、南北へ三十間、東西へ廿五間の廻廊侍り、潮のみつときは、かの廻廊の板敷のしたまで海になり、潮のひく時は、白きすなご五十町ばかり也。しかれば塩のさしたる時参れば、舟にて廻廊まで参る也。けだかくいみじき事たとへもなく侍り。

厳島に触れた中世の文学作品は、他にも存するが割愛する。海の中に鳥居がたっていること、廻廊の下まで潮が満ちてくることなどに、神秘性を感じ取っていたようである。○ここで海上を漕く船の漕き方を詳記しているのも注意される。舟子によると、引き潮に向って船を漕ぐと進行が遅いこと、潮の満干の早い時には、磯際の方が漕ぎよいとする。武士であり、かつ、今まさに戦いを目前にしている了俊は、この舟子の言葉を、どのような思いで聞いたであろうか。それは、軍船をひきいているだけに、海上での戦いと関連付けてとらえていたのではなかろうか。「平家物語」（巻十一、鶏合壇浦合戦）で、「さる程に、源平の陣のあはひ、海のおもて卅余町をぞへだてたる。門司・赤間・壇の浦はたぎ（ツ）ておつる塩なれば、源氏の舟は塩にむかふて、心ならずをしおとさる。平家の船は塩におうてぞいできたる。おきは塩のはやければ、みぎはについて、梶原敵の舟のゆきちがふ処に熊手をうちかけて、おや子主従十四五人のりうつり、うち物ぬいて、ともへにさん〳〵にないでまはる」などとあるように、潮の流れと軍船とのかねあいが勝負にかかわってくることがあるからである。平家と源氏の最後の決戦である壇の浦の戦いで、潮の満干が勝負を左右した伝承は、あまりにも著名である。

十二　佐西から大野浦へ

廿一日は、此（の）佐西を出（で）て、地の御前といふ社の西干潟より山路に入（る）ほどに、大野山中といふ所に来ぬ。①

長月の在明の月影、しら〳〵と残りて、木の下露は、まことに笠も取りぬべく、所狭き紅葉の色濃く見渡されたる中に、椎の葉の嵐に白く靡きて、松の声、山川の音に響きあひたる朝朗け、身にしみて覚えたり。

とにかくに知らぬ命を思ふか②なわが身五十路に大野中山

昔誰蔭にもせむと蒔く椎の大野中山かく繁るらむ

古集に侍る③〔やらむ〕、「向ひの岡④に椎蒔きて」といふ事の⑤、ふと思ひ出（で）侍（り）てよめるなるべし。

此（の）山分（け）下（り）て、また浦⑥に出（で）たり。ここをも大野浦といふ也。向ひの山は、厳島山の南のはずれなりけり。行（き）めぐりて、なを同（じ）所になりに

⑦たるかな。今朝佐西の浦を出（で）つる友の大船どもも、⑧今ぞ⑨追風に帆影⑩も⑪見ゆめる。船なる⑫人も、此方をゆかしと⑬見（み）をこすめり。

大野浦をこれかと問へば山梨の片枝の紅葉色に出（で）つつ

此（の）舟どもの中に、朝餉⑭の営みするとて、煙の立ち上りつつ、浪に映ろふ景色、心あらん人に見せまほしかりき。

浪の上に藻塩焼くかと見えつるは海人の小舟に炊く火なりけり

〔校異〕①来ぬ―来りぬ（群）。②かな―には（内・九）。③る（やらむ）―底本「るせん」、松・扶・中・群の諸本で校訂。内・九の二本は「に覧」。④岡にしゐまきて―岡にまくしゐのまきて（内・九）。岡にしゐまたて（群）。⑤の―云事の（内・九）。⑥浦―海（内・九）。⑦たる―ける（内・九）。⑧も―ナシ（松）。⑨そ―も（内・九）。⑩も―し（内・九）。⑪みゆ―底本「みゆる」、松・扶・中・群・内・九の諸本で校訂。⑫人も―人々も（内・九）。⑬み―て（内・九）。⑭の―田（内）。

〔語釈〕○廿一日―九月二十一日。○佐西―既出（第十章）。○地の御前といふ社―広島県佐伯郡廿日市町地御前にある地御前神社。祭神は伊都岐島姫命。厳島対岸の海浜にあり、厳島神社の外宮で、同社の摂社。○大野山中―安芸国佐西郡のうち、現広島県佐伯郡大野町の辺。地御前と大野町の間に、中山という峠がある。○長月の在明の月影―既に第十章に「長月の十九日の在曙の月に出でて」とみえたが、それは海浜で見た月。ここは山中での長月の有明の月。○しら〳〵と残り―「しらじらし」は、明るい意と色の白い意を合せもつ形容語。ここは有明の月光を「しら〳〵し」と描写したもの。用例「しらしらししらけたるとしつきかげにゆきかきわけてむめの花をる」（和漢朗詠集）。○木の下露は、まことに笠も取りぬべく―木の枝からこぼれ落ちる露が繁くて笠を手に取って行かねばならない意。「まことに」としたのは、「みさぶらひみかさと申せ宮木ののこのしたつゆはあめにまされり」（古今集・東歌）を念頭にしたため。「源氏物語」（須磨）にも、「『ひぢかさ雨』とか降りきて、いと、あわただしければ、みな帰り給はんとするに笠もとりあへず」とみえる。○所狭き紅葉の色濃く―所狭しと紅葉が一面に色濃くなっている意。○椎の葉の嵐に白く靡きて―「椎」はブナ科の常緑喬木。鬱蒼とした大木になる。秋に果実がみのり食用となる。前の紅葉の紅色と椎の葉が嵐に吹かれて葉裏を白くみせるのと、色彩の対照も描く。用例「月のこるむかひのをかのしひの葉に山風しらむ明がたの空」（為尹千首）。○松の声、山川の音に響きあひたる朝明け、身にしみて―夜がほのぼのと明ける頃、松風の音と山川の音が響き合っているのを「身にしみて」聞き入っている心境。音と音が互に響き合う場面は「源氏物語」に「三味堂ちかく、鐘の声、松風にひびきあひて、物悲しう」（明石）、「こと〳〵しき高麗・唐土の楽よりも、東遊の、みみなれたるは、なつかしく、おもしろく、波・風の声に響きあひて、さる木高き松風に、吹きたてたる笛の音も、ほかにて聞く調べにはかはりて身にしみ」（若菜下）などはじめ五例ほどある。○「とにかくに」の歌―「知らぬ命」は、すでに「いまさらに知らぬ命をなげくかな変らぬ世々といひし契りに」（第六章）みえた。「わが身五十路」とうたうが、この年了俊は四十六歳頃。老齢を強調するための修辞的表現。「大野」に「五十路を負ふ」を掛ける。

類歌「つかへつつみるぞかひある影なびく我が身いそぢの秋のよの月」（続千載集・秋下・前内大臣）、「なにごとをみきとかいはん数ならで我が身いそぢにたけくまの松」（草庵集）。○「昔誰」の歌―「大野」に「椎の生ふ」を掛ける。この歌は、次の「古集に侍る〔やらむ〕……」とあるように、「万葉集」（巻七）の「片岡のこの向つ峯に椎蒔かば今年の夏の蔭に比へむか」（この歌は「古今六帖」にも「かたをかのむかひのみねにしひまくはことしの夏のかげにせむかも」とみえる）の歌を念頭に詠じたもの。なお「源氏物語」（椎本）で、薫が亡き八宮を偲んで詠じた「たちよらむ蔭と頼みし椎が本むなしき床になりにけるかな」も想起される。類歌「いつのまにたれたねまきてかたをかのむかひのみねにしげるしひしば」（新撰六帖・藤原為家）。現在、この了俊の歌碑が大野山中に建っている（簗瀬一雄氏「今川了俊の歌碑」芸文東海、第12号、昭和63年12月参照）。○「向ひの岡に椎蒔きて」―前項で示した「万葉集」（または「古今六帖」）の歌をさす。○大野浦―広島県佐伯郡大野町と厳島との間にある大野の瀬戸の本土側。山陽本線に大野駅がある。「ここをも」といったのは、大野山中を通過し、大野浦に出たため。○向ひの山は、厳島山の南のはづれ―厳島の南西にある、岩船岳あたりをさすか。○行（き）めぐりて……同（じ）所に―厳島の見える海岸から山中に分け入って、再び厳島の見える海岸に出たことを意味する。○佐西の浦を出（で）つる友の大船ども―「佐西の浦」は既出。軍船がこの港に停泊していたようだ。○追風―船の方向に吹く風。順風。○帆影―遠くに見える帆の姿。用例「島がくれはるかのおきに行く船のほかげをだにも見えじとや思ふ」（為尹千首）。○船なる人―了俊に随行して来た九州諸豪族の一部。○「大野浦を」の歌―本歌「をふのうらにかたえさしおほひなるなしのなりもならずもねてかたらはむ」（古今集・東歌）。本歌の「をふのうら（麻生浦）」は、伊勢国の歌枕であるが、同音なので、ここでは「大野浦」と絡めたもの。「山梨」は山中にはえるバラ科の落葉高木。五月頃、新枝の先に白花を開き、秋に果実が熟す。「紅葉色に出（で）つつ」とは、はっきり表面に現れること。用例「ゆく水のふちせもわかずあすかがは秋のもみぢの色にいでつつ」（続後撰集・秋下・太宰権帥為経）。○此（の）舟ども―先の「友の大船」ではなく、大野浦にいる漁師の船。○朝餉の営み―朝食の用意。○心あらん人に見せまほし―情趣を解する人に、この光景を見せたい。「こころあらむ人にみせばやつのくにのなにはわたりのはるのけしきを」（後拾遺集・春上・能因法師）を念頭にした表現。○「浪の上に」の歌―海上から煙の立ちのぼるのを見て、浪の上で藻塩を焼いているのかと見えたのは、実は、海人が小舟の中で炊事をしている煙だったという意。この歌の発想の背景には、「源氏物語」（須磨）の「煙のいと近く、時々たちくるを、『これや、海士の塩焼くならむ』と、思しわたるは、おはしますうしろの山に、柴といふ物、ふすぶるなりけり」の場面が重ねられていたとみてよい。参考歌「夕日さす波のうへよりたつ煙いかなるうらにもしほやくらん」（玉葉集・雑一・藤原隆祐）。

〔通釈〕（九月）二十日は、この佐西を出発して、地御前という神社の西にある干潟を通ってから山路に入ってゆくうちに、大野山中という所にやって来た。

長月の有明の月光が、白々として空に残っていて、木から零れる露が、まさしく（あの「みさぶらひ」の歌のように、雨のごとく落ちてきて）笠を取って行かねばならないほどであり、あたり一面の紅葉の葉が色濃く見渡される中に、椎の葉が嵐に吹かれて白く靡き、松風の声と山川の音が響き合って聞えてくるあけがたは、身にしみて情趣を感じた。

我が齢も五十路にかかって、この大野中山を行くと、明日をも知れない儚い命のことをあれこれと思うことだ。

大野の中山に、このように繁っている椎の木は、その昔、いったい誰が蔭にしようと種を蒔いたのであろうか。

（この歌は）古集にあったと思うが、「向ひの岡に椎蒔きて」という歌のことを、ふと思い出して詠んだものである。

この山を分け下って、再び海辺に出た。ここも大野浦というらしい。向い側に見えるのは、厳島山の南のはずれの山であった。巡り巡って、やはり同じ所に出てきたことだ。今朝、佐西の浦を出帆した仲間の乗った大きな船団の、今まさに追風にはためく帆の姿も遠くに見えるようだ。船に乗っている人も、こちらの方を、なんとなく慕わしく見ているだろう。

大野浦という所はここかと尋ねたところ、山梨の片枝の紅葉がはっきり色に出しながら、「そうだ」と答えていることよ。

この舟どもの中に、朝食の仕度をするというので、その煙が立ちのぼりながら、浪に映じている光景は、情趣を解する人に見せたいほどだった。

浪の上で藻塩を焼いているのかと見えた煙は、実は海人が舟で朝食を炊く煙だったよ。

〔考〕○この章は、大野山中に分け入り、再び大野浦に出てくるまでの記事だが、各々の景に接しながら、古歌を想起して感慨にふけっているのが特色となっている。大野山中では、木の下露の零れるのを体感して、「古今集」の東歌を、嵐に葉裏を白くかえす椎の木を見て「万葉集」の歌を、大野浦では「古今集」の東歌や「後拾遺集」の能因法師の歌を各々に想起している。眼前の景観と古歌の世界を重ね、ゆきつもどりつして叙述するスタイルである。○佐西の浦から出航した友の大船に触れているが、了俊一行とは別れて海上から筑紫に向う船団であろう。この船団にどういった人々が乗船し、どんな行路をとろうとしていたのかはよくわからない。〔語釈〕では、川添昭二氏の「二十一日朝、了俊に随行してきた九州諸豪族の一部は、大船に乗り順風に帆をあげて佐西浦から西下して行った」（『今川了俊』人物叢書）によって注解したが、より詳細な事実を歴史学の立場から教示願いたいものである。

十三　岩国山を越えて富田の浦へ

それよりこなたは、みな山路なり。津葉・黒河①・こえ松②・屋を松などいふも、海かたかけたる深山路③なり。大谷とて岸高き山川流れ出（で）て見ゆ。これより周防の境と申（す）。今夜は、多田といふ山里にとどまりて、朝に又山路になりぬ。これなむ岩国山なりけり。一（つ）二つある柴の庵だになく、人離れ④〔た〕る山中に、深山木の蔭を行（く）。誠（に）岩高く、物心細き路なり。夕になりぬれど、木樵だに帰らず、鐘の声も聞こえぬ所なり。

とまるべき宿だに⑤なきを駒なづむ岩国山に今日や暮らさん

立（ち）帰り見る世もあらば人ならぬ⑥岩国山も我が友にせむ

足乳根の親に告げばや荒して⑦ふ岩国山も今日は⑧越えぬと

古き歌に、「岩国山を越えん⑨〔日は〕手向よくせよ荒し⑩その路」とよみて侍るやらん、其（れ）をかたよせてよめる

なるべし。

はる〳〵と越（え）過（ぎ）て、又海老坂といふ里に寺の侍（り）しにとどまりぬ。⑬廿二日なるべし。

又の日は、遠石の浦とて、山本南に向（ひ）て、八幡の御社居ます。その御前の浜の潮干の方、⑭遙かなる沖に、大（き）なる石の先上りて見え侍（る）。是を遠石とは申（す）とかや。「人こそ知らね」とぞ言はまほしきや。此（の）御神にも上矢一（つ）奉りぬ。

其（の）日は暮（れ）ぬほどに、富田といふ浦に着きたり。⑮これも北西をかけて入海遙かにて、小島どもの名も知らぬが、⑰いくらもうちつづきたり。其（の）中に、又いつく嶋といふも侍⑱（り）しなり。釣りする海人の船ども、嵐に向ひて、忙はしげに来るも見ゆ。雨気になりにたりとて、村雲の足早くきほひ来たり。

夕潮につれてや来つるいとどしく足早船の富田の入海よーに（内・九）。⑫しーき（松・扶・中・群・内・九）。⑬廿二ー廿一（内・九）。⑭はるかにーみるか（内）。⑮たりーぬ（内・九）。⑯ともーナシ（内・九）。⑰いくらーいくつ（内・九）。⑱侍ー侍ら（松）。

〔校異〕①黒河ー見河（内・九）。②松やを松ーやけ松（内・九）。③ちーナシ（内・九）。④〔た〕ー底本「な」、松・扶・中・群・内・九の諸本で校訂。⑤なきをーなをき（内・九）。⑥ぬーん（内・九）。⑦はやーよや（内・九）。⑧てふーそふ（内・九）。⑨はーナシ（内・九）。⑩〔日は〕ー底本「只」、松・扶・中・群・内・九の諸本で校訂。⑪

〔語釈〕○津葉（つば）ー広島県大竹市玖波町のこと。海岸部を山陽道が通り、宿駅として賑った。古くは「久波・久芳」とも書き、「津波」として「つば」「つばた」とも称した。○黒河ー大竹市小方町黒川の辺。古くは「黒河」とも見え、「墨川」とも書いた。玖波村の南西にある。沿岸の平地を通る山陽道沿いに集落がある。○こえ松・屋を松ー「こえ松屋を松」を「こえ松・屋を松」と区切ったのは『大日本地名辞書』や『大日本史料』（六の三十四）に依拠したもので、他に根拠があるわけではない。この両地名については渡辺氏も説明を加えていない。山陽道の道筋からみて玖波・黒河から西の地のようなので、現在の東栄、油見の辺かと推測されるが、未詳。○海かたかけたる深山路ー「かたかく（片掛く）は片方を物に寄せかける意。用例「山に片懸けたる家なれば、松陰しげく風の音も、いと、心細きに」（源氏物語・手習）。ここは、海がすぐそばにある山道のこと。○大谷とて岸高き山川ー渡辺氏「大谷川と云ふは防芸両国の境なる大竹川。即ち山口県より云ふ小瀬川なるべし」とする。「続日本紀」（天平六年九月十六日の条）に、「安芸、周防二国以二大竹河一、為二国境一也」とみえる。広島県側からは木野川のこと。「鹿苑院殿厳島詣記」にも「おほたき川とて、安芸と周防のさかひの川の末の海づらを過て」とみえる。○周防ー旧国名。山陽道八か国の一つ。現在の山口県の東部。防州。○多田ー山口県岩国市多田。錦川の下流左岸に位置。当地は山陽道と石州街道の出会う地点。○岩国山ー「万葉集」以来の歌枕。岩国市と玖珂郡玖珂町との境界にある欽明路峠付近の山々をさすか。『日本歴史地名大系』は、この「道行きぶり」の岩国山も内容からみて、「岩国山は多田の西方にあり、半日もかかる深山だったらしい。これもやはり柱野辺りから欽明路峠へかけての山とするのが自然であろう」と解説する。なお、

近世以降に岩国山と呼ぶのは、岩国市の錦見・室の木・関戸・玖珂郡和木町瀬田にまたがる山をさす。○一（つ）二つある柴の庵だになくー「柴の庵」は屋根を柴で葺いた小屋。ここは、粗末な柴の庵の一、二軒くらいあってもよいのに、それさえ見えない意で、次の「人離れ（た）る山中」を強調する表現。○誠（に）岩高くー「誠（に）」としたのは「岩国山」という名称を受けてのこと。○物心細き山路ー「伊勢物語」（第九段）の「宇津の山にいたりて、わが入らむとする道はいと暗う細きに、蔦、かへでは茂り、もの心細く」を想起させる。○夕になりぬれど、木樵だに帰らず、鐘の声も聞こえぬ所ー「木樵」は山林の木を切るのを職業とする人。「鐘の声」は、ここでは入相の鐘。夕方になっても木樵も帰らず、鐘の声も聞こえぬことで、人気のない物寂しい深山の雰囲気を強調。「山路日落、満レ耳者樵歌牧笛之声」（和漢朗詠集・下・山家）なども念頭にするか。○「とまるべき」の歌ー「駒なづむ」は乗っている馬が行き悩むさま。参考歌「駒なづむ岩木の山をこえわびて人もこぬみのはまにかもねん」（拾遺愚草）。宿る所もない岩国山の山中で、日暮れを迎えた旅の不安を抒情する。○「立（ち）帰り」の歌ー「人ならぬ岩国山」は「人ならぬ岩」と「岩国山」を掛ける。ここには「人非二木石一皆有レ情」（白氏文集・巻四・諷諭四・李夫人）などを背景に、人でない岩国山を友としようとする所に、作者の人間不信と孤独感が窺える。参考歌「人ならぬいはきもさらにかなしきはみつのこじまの秋の夕ぐれ」（続古今集・雑上・順徳院）、「たけはただこのきみとのみなづけつつさかゆるまつをわがともにせん」（有房集）。○「足乳根の」の歌ー「足乳根」は母・親にかかる枕詞。「親」は駿河にいる父範国とその妻をさす。厳島参詣の所でも「故郷の親も恋しく侍る哉」と、親のことは、了俊の念頭からずっと離れなかったようだ。「荒してふ」は次項に引く「万葉集」の歌を念頭にしている。険阻な岩国山を今日無事に越えたことを親に知らせたい心を詠出。類想歌「たよりあらばいかで宮こへつげやらむけふ白河の関はこえぬと」（拾遺集・別・平兼盛）。「さつまがたおきの小島にわれありとおやにはつげよやへのしほかぜ」（千載集・羇旅・平康頼）。○古き歌に「岩国山を……」ー「周防にある磐国山を越えむ日は手向よくせよあらしそのみち」（万葉集・巻四・少典山口忌寸若麿）の歌をさす。「古今六帖」（一二七九）にも載る。○かたよせてよめるー先の「足乳根の」の歌は、「万葉集」の歌を絡めて詠じた意。○海老坂といふ里に寺の侍（り）しー「海老坂」は山口県熊毛町呼坂（よびさか）の辺。中世には「えびさか」が一般的であった。了俊達が泊った寺は、具体的に未詳だが、この里には、真言宗亀井山神光院、曹洞宗天王山西光寺、浄土真宗本願寺派の西善寺などの寺が存する。○遠石の浦ー山口県徳山市遠石町、徳山湾に流れ込む梅花川の河口付近。○八幡の御社ー遠石八幡宮のこと。徳山市街地の東部、梅花川東岸の高台に南面して鎮座。応神天皇を主祭神として、弓矢の神ということで尊崇される神社。○大（き）なる石ー遠石八幡宮の影向の神である影向石という大石が徳山市の西町にある。○「人こそ知らね」ー「わが袖はしほひにみえぬおきの石の人こそしらねかわくまぞなき」（千載集・恋二・二条院讃岐）の歌をさす。遙かな沖にある石を見て、二条院讃岐の歌を想起、了俊自身の、人に理解してもらえない苦しい胸中を暗示する。○上矢ー「上差し矢」に同じ。箙に普通の矢を差し、その表側に差し添えた矢。「此（の）御神にも」と記したのは、すでに吉備津彦神社・吉備津神社にも「上矢一づつ」奉ってきたため。○富田ー山口県新南陽市富田。富田の浦は、富田川より夜市川にわたる地域とされる。当時から瀬戸内海航路の要津であった。○小島どもの名も知らぬー富田の沖には、竹島・中の島・西之島・西小島・東小島・蛭島・鍋島などをはじめ多くの小島がある。○いつく嶋ー渡辺氏「小島は現今富田沖にある竹島・錫島・黒髪島、仙島等なり。然るに其中に又いつく島といいといふも侍りし也と紀行にあれども厳島といふ島は富田沖諸島中になし。此れ疑はし、恐らく誤ならん」とするように、該当の島

を見出し得ない。現在、地図でみると、富田沖の大津島の西に「五ツ島」なる小島がある。この「いつつ島」を「いつく島」と聞き誤ったのであろうか。ここで「又」としたのは、先に参詣した厳島神社を念頭にしたため。○釣りする海人の船……来るも見ゆー漁民の辛苦多き生活を描写。「釣する海人」は歌語的表現。用例「伊勢の海につりするあまのうけなれや心ひとつを定めかねつる」（古今集・恋一・読人しらず）、「さざなみのひらの山かぜ海ふけばつりするあまの袖かへるみゆ」（新古今集・雑下・読人しらず）。○雨気ー「あまげ」。雨が降りそうな空の様子。雨模様。用例「あはれなる夕のけしきに、いとどうちしめりて、『雨気なり』と人々のさわぐに」（源氏物語・藤裏葉）。○村雲の足早くきほひ来たりー群がり立つ雲の早い動きと競うように船が早く帰るさま。参考歌「風さわぎむら雲まよふ夕べにもわするる間なくわすらえぬ君」（源氏物語・野分）、「嵐ふきこの葉ちりかふ夕暮にむら雲きほひ時雨ふるなり」（玉葉集・冬・永福門院治部卿）。○「夕潮に」の歌ー「富田」に「足早船」が「富む」（多い）を掛ける。「足早船」は速度の速い船。ここは「足早し」と掛けている。用例「みしままにめぐりもあはで島づたふあしはや小舟とほざかりつつ」（新千載集・恋四・前大納言為定）。

〔通釈〕そこから行く先は、すべて山路である。津葉・黒河・こえ松・屋を松などという所も、海が側に迫っている深山の路である。大谷といって岸が高い山川が流れているのが見える。ここからが周防の国の境ということだ。今夜は、多田という山里に滞在し、翌朝には再び山路を行くことになった。この山路こそ、かの岩国山なのであった。普通なら、一、二軒あってもよい柴の庵さえなく、人気のない山の中で、深山木の暗い蔭を行く。噂通り本当に岩が高く聳え、物心細い路である。夕方になっても、木樵さえ帰って来ず、入相の鐘の声も聞えない所である。

泊ることのできる宿さえないのに、駒が難渋して進まぬこの岩国山で、今日は日暮れを迎えるのであろうか。

もしも、再び無事に戻って来る時があったとしたら、人ではない、この岩国山を私の友にしよう。

大へん険阻だといわれる岩国山も、今日無事に越えたと、親に告げ知らせたいものだ。

古い歌に「岩国山を越えん日は手向よくせよ荒しその路」と詠んだのがあったと思うが、その歌にひっかけて詠んだ歌である。

はるばると山路を越え過ぎて、また海老坂という里にあった寺に滞在した。（九月）二十二日のことだった。

次の日は、遠石の浦といって、山の麓に南方に向って、八幡の神社が鎮座している。その神社の前の浜の干潟から遙かな沖に、大きな石で、突端が海面より上がっているのが見えている。これを遠石というとか。「人こそ知らね」と言いたいところだ。この御神にも上矢を一本奉納した。

その日は、日が暮れないころに、富田という浦に到着した。ここも北西の方向に入海が遙かに入り込み、そこに名も知らない小島が、たくさん並んでいた。その中に、また「いつく島」という島もありました。釣をする漁師の船どもが、嵐に向かって、慌しげにやって来るのが見える。雨模様になったというので、足早い村雲と競争するように急いでやって来た。

富田の入海には、夕潮につれてやって来たのか、いよいよ速度をあげて足早船が多くあつまっていることだ。

〔考〕○ここでは、三首もの和歌を詠じている岩国山の描写が印象深い。岩国山は「万葉集」以来の歌枕とされるが、「万葉集」でも「周防にある磐国山を越えむ日は手向よくせよあらしそのみち」（巻四）と一首みえるだけであり、その後、詠歌対象にされることは多くなかった。了俊は、岩国山へ到る道程を、「それよりこなたは、みな山路なり」「深山路なり」「朝に又山路になりぬ」と「山路」を辿り続けた果て

に岩国山に到り着いたことを強調、さらに、その辺には柴の庵すら一軒もなく、木樵の姿もなく、鐘の声も聞えぬ全く人離れた山中で、その名のごとく岩石の高く連なる心細い山路だとする。岩国山を詠み込んだ従前の歌は、「あふ事は君にぞかたき手向していはくに山は七日越ゆとも」（壬二集）、「うごきなき岩くに山に宮木ひくたみの数そふ世にもあるかな」（宝治百首・定嗣）、「手向せしいはくに山の嶺よりも猶さかしきは此世なりけり」（竹風和歌抄）のごとく、岩国山を「かたき」「うごきなき」「さかしき」などの具体的な比喩に援用しているものであった。けれども了俊の歌は、自分の足で、この歌枕に立ち、険阻な山を越え行く感慨を率直に抒情しており、特に、再び生きてこの岩国山を越えることがあるとすれば、この山を我が友にしたいとの歌には、彼の複雑な思いが吐露されていて印象深い。○遠石八幡宮に上矢を一本奉納しているのも、「道行きぶり」における八幡信仰との関連で留意すべき事柄であり、富田の浦に、海人の釣り船が村雲と競うように慌しく入湾してくるさまも、風雲急を告げる戦いの雰囲気を想像させる描写である。

（未完）

（平成四年七月十四日受理）